

～旧約聖書を読んで感じること～ (50) 祭司エリの息子ピネハスの妻

祭司エリには二人の息子、ホフニとピネハスでしたが、彼らも祭司として父のもとで主に仕えていました。とはいうものの、彼らは民の捧げ物を好き勝手に取扱い、「主を知ろうとしなかった」と記されています。父エリは彼らの評判を聞き、諭しましたが、彼らは耳を貸そうとしませんでした。エリの元に神の人が訪れ、エリの家への神の裁きを伝えました。

わたしを重んずる者をわたしは重んじ、わたしを侮る者をわたしは軽んずる。あなたの家に長命の者がいなくなるように、わたしがあなたの腕とあなたの先祖の家の腕を切り落とす日が来る。(サム上 2:30-31)
さらにエリは少年サムエルを通して同じ言葉を知らされ、神の裁きを確認しました。

さて、エリの息子ピネハスには妻がいました。祭司は同じレビ族から処女を娶らなければならないという戒めがあります。したがって、彼女は祭司の娘であり、処女性を求められ、汚れない女性として生きていたはずですが、ピネハスは性的乱脈に耽り入ることはない夫でした。

イスラエルがペリシテに向かって出撃し、エベン・エゼルに陣を敷き、野戦を開始した時、イスラエル軍はペリシテ軍に打ち負かされて、およそ 4,000 人の兵士が死にました。そこで、長老たちは「陣営に主の契約の箱をシロから運んで来よう。そうすれば、主が我々のただ中に来て、敵の手から救ってくださるだろう」と言いました。長老たちも神殿側も「箱」に神通力があると信じたのです。契約の箱を陣営まで運ばせましたが、逆に大敗を喫し、箱は奪われ、箱を運んできた祭司エリの息子達、ホフニとピネハスも殺されました。



エリの死 Julius Schnorr von Carolsfeld

その知らせがシロのエリのもとに届けられ、それを聞いて、エリはあおむけに倒れて首を折って死にました。おりしも、ピネハスの妻が出産間近の身でしたが、神の箱が奪われ、舅も夫も死んだとの知らせを聞くと、陣痛に襲われてかがみ込み、死が迫っていましたが、男児を産みました。(絵の左側) 夫の死を悲しむ以上に、「箱」が奪われたことで、絶望してしまいました。子どもが与えられたのにもかかわらず、彼女は何の希望も喜びも感じられず、子どもに「イカボド(栄光は失われた)」と名付けました。そして、つぶやきました。

彼女は言った。「栄光はイスラエルを去った。神の箱が奪われた。」(サム上 4:22)

確かに「箱」は出エジプトを成し遂げた神の祝福の記念の印であり、イスラエルの旗印であったでしょう。また、ヨシュアに率いられてヨルダン川を渡るとき、まず、「主の箱」を担いで川に入り、川の真ん中の川床に来たとき、川は干上がり、民が無事に川を渡ったとの故事があります。けれども「箱」自体に神の栄光や力が宿っているわけではありません。神が告げているように、「しかし、わたしは生きており、主の栄光は全地に満ちている。」(民 14:21) のであり、神の前に立つ時、栄光と力が示されるのです。ピネハスの妻は、真面目であるべき祭司の夫が不実な男であり、家族の喜びを味わえない、不幸な寂しい妻であったと思います。祭司の娘として生まれ、生真面目だったのでしょう。生きる場が神殿の中だけにとどまり、神殿が守られ、祭具が整っていることが大事だったのでしょう。目に見える道具を神聖視してしまい、神に祈り求めることを忘れたのでしょうか。